

高齢者のボランティア活動に関連する要因

オカモト ヒデアキ
岡本 秀明*

目的 人口高齢化の進行の中であって元気な高齢者数も増加しているわが国では、高齢者は社会や地域に貢献する資源であるという観点を持ち、高齢社会を構築していくことが求められる。本研究では、高齢者のボランティア活動に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

方法 大阪市24区のうち8区から無作為抽出し、65～84歳の高齢者1,500人を対象に自記式質問票を用いた郵送調査を実施した。有効回収数771人のうち、特定項目に欠損値のない1671人を分析対象とした。分析は、ボランティア活動の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。独立変数は、「家族・経済・他（4変数）」「健康（2変数）」「暮らし方の志向性（7変数）」「技術や経験（2変数）」「社会・環境的状况（2変数）」という5領域の計17変数とし、統制変数は、年齢と性別を投入した。領域ごとに分析し、次に、統計学的な有意が認められた変数をすべて投入して分析を行った。

結果 ボランティア活動をしている者は24.0%であり、年1～2回活動している者が最も多かった。ボランティア活動への関心がある者は58.8%、活動への参加意向がある者は48.9%であった。ロジスティック回帰分析を行った結果、ボランティア活動をしている者の特性として、「中年期にボランティア経験がある」「地域に貢献する活動をしたい」「ボランティア活動情報の認知の程度が高い」($p < 0.001$)、「技術・知識・資格がある」「親しい友人や仲間が多い」($p < 0.01$)、「主観的健康感が高い」($p < 0.05$)ということが明らかになった。

結論 ボランティア活動への関心のある者は6割弱、参加意向のある者は5割弱であるのに対し、実際に活動している者は2割強にとどまっていた。活動への関心や参加意向のある者を実際の活動に結びつけやすい環境を整備していくことにより、ボランティア活動に参加する高齢者が増加することが期待できる。高齢期以前にボランティア経験を持てるような場の設定や啓発、活動への参加の機会に関する情報を多くの高齢者に認知してもらえ環境を整えていくことなどが求められる。

キーワード 高齢者，ボランティア，社会活動，社会参加

はじめに

高齢社会対策大綱は、ボランティア活動をはじめとする高齢者の自主的な活動の支援を図るものとしている。総務省の調査によると、ボランティア活動の行動者率は、65～69歳で31.4%、

70歳以上で25.5%となっている¹⁾。今後の高齢社会を構築していく際に、高齢者は地域に貢献する資源であり²⁾、世話を受ける立場ではなく社会や地域に貢献できるという観点も持つことが求められる³⁾。高齢者のボランティア活動の効果について、藤原らは北米での知見を検討し、高齢者自身の身体的な健康や心理的な健康度を高めるものとしている⁴⁾。

* 和洋女子大学家政学部生活環境学科講師

高齢者のボランティア活動に関連する要因を多変量解析により検討した研究は、活動の効果の研究と比較してそれほど多いとはいえない。そのような研究によると、ボランティア活動をしている高齢者の特性は、年齢が低い²⁾⁵⁾、女性²⁾、非婚者と比較して配偶者ありや未亡人²⁾、独居²⁾、学歴が高い¹⁾²⁾⁵⁾⁻⁷⁾、経済状況が良好²⁾⁸⁾、健康状態が良好²⁾⁵⁾⁷⁾、IADL (instrumental activities of daily living) が良好⁵⁾⁶⁾、無職⁶⁾、常勤と比較してパートタイム勤務⁷⁾、宗教を重視⁵⁾、過去に活動経験あり⁶⁾⁸⁾、活動的な生活をしている⁶⁾、所属している組織の数が多い⁶⁾⁷⁾、教会へ通う頻度が高い⁶⁾、身近に参加機会がある⁹⁾、外向的⁷⁾、ボランティア活動を重要と認識⁸⁾、ボランティア活動により恩恵が得られると認識⁹⁾、ボランティア活動に束縛されるわけではないと認識⁹⁾、ボランティア活動をすべきと認識⁹⁾、高齢でもボランティア活動できると認識⁹⁾、他の活動よりもボランティア活動を好む⁹⁾などが報告されている。

さらなる人口高齢化の進行、元気な高齢者数の増加、2007年からの団塊世代の大量退職を迎えるわが国では、高齢者の能力を活用していくことが求められるため、高齢者のボランティア活動は注目すべき重要なテーマの1つといえよう。したがって、ボランティア活動をしている高齢者の特性や、活動参加を妨げる要因を把握し、活動しやすい環境を整えていくことが求められる。しかしながら、わが国では、ボランティア活動の関連要因を多変量解析により検討した研究は非常に少ない。そこで本研究では、ボランティア活動に関連する要因を検討するために5つの領域の要因を設定し、関連要因を明らかにすることを目的とした。

研究方法

(1) 調査の対象と方法

大阪市24区のうち8区から選挙人名簿を用いて無作為抽出し、65～84歳の高齢者1,500人を対象に自記式質問票を用いた郵送調査を実施した。調査期間は、2005年4月1日から5月10日

表1 分析対象者の年齢・性別の分布 (n=671)

	実数 (%)
年齢	
65～69歳	235 (35.0)
70～74	214 (31.9)
75～79	140 (20.9)
80～84	82 (12.2)
平均値±標準偏差	72.4±5.1歳
性別	
男性	330 (49.2)
女性	341 (50.8)

までであった。有効回収数(率)771人(51.4%)のうち、年齢、性別、ボランティア活動状況の項目のいずれかに無回答の者は除外し、分析対象者は671人とした(表1)。

(2) 調査項目

1) ボランティア活動に関する項目

ボランティア活動の状況は、最近の活動状況(過去1年間)を「全くしていない」から「週3回以上」までの6つの選択肢で尋ねた。ボランティア活動への関心の程度は、「とてもある」から「全くない」までの4つの選択肢、ボランティア活動への参加意向は、現在活動をしているかどうかに関係なく、活動したいと思うかどうかを「とてもそう思う」から「全く思わない」までの4つの選択肢で尋ねた。なお、同居家族や別居している親族への手助けは、ボランティア活動に含まないものとした。

2) 独立変数

独立変数は、以下に示す5領域、計17変数を設定した。

「家族・経済・他」の領域について、配偶者の有無(あり=1, なし=0)、居住年数(10年未満を基準カテゴリーとした2つのダミー変数)、学歴(中学校卒業=0, 高校・短大・大学等卒業=1)、暮らし向き(大変ゆとりあり=5点～大変苦しい=1点)の4変数とした。「健康」の領域(2変数)について、IADLは、食事の用意、預貯金の出し入れ、日用品の買い物、バスや電車の利用の4項目それぞれについて、できる=1点、できない=0点として単純加算し、4点満点を自立とする得点を作成した

(Cronbachの係数 = 0.77)。主観的健康感は、非常に健康 = 4点 ~ 全く健康でない = 1点とした。「暮らし方の志向性」の領域は、内閣府の調査¹⁰⁾を参考にして、生活に充実感を持つ、新たな友人を得る、社会への見方を広げる、健康や体力に自信をつける、新たな知識や技術を身につける、地域に貢献する活動をする、若い世代と交流する、という7変数とし、それぞれ、そのような暮らし方をしたいかどうかを尋ね、

表2 分析対象者の特性

	実数 (%)
[家族・経済・他]	
配偶者の有無 (n = 658)	
あり	436 (66.3)
居住年数 (n = 668)	
20年以上	506 (75.7)
10 ~ 20年未満	84 (12.6)
10年未満	78 (11.7)
学歴 (n = 668)	
中学校卒業	266 (39.8)
高校・短大・大学等卒業	402 (60.2)
暮らし向き (n = 668)	
大変ゆとりあり	27 (4.0)
ややゆとりあり	95 (14.2)
ふつう	354 (53.0)
やや苦しい	140 (21.0)
大変苦しい	52 (7.8)
[健康]	
IADL (n = 652)	
平均値 ± 標準偏差	3.6 ± 0.9
主観的健康感 (n = 654)	
非常に健康	53 (8.1)
まあ健康	390 (59.6)
あまり健康でない	176 (26.9)
全く健康でない	35 (5.4)
[暮らし方の志向性]	
生活に充実感を持ちたい (n = 664)	
そう思う	606 (91.3)
新たな友人を得たい (n = 666)	
そう思う	301 (45.2)
社会への見方を広げたい (n = 661)	
そう思う	449 (67.9)
健康や体力に自信をつけたい (n = 663)	
そう思う	601 (90.6)
新たな知識や技術を身につけたい (n = 664)	
そう思う	376 (56.6)
地域に貢献する活動をしたい (n = 656)	
そう思う	368 (56.1)
若い世代と交流したい (n = 639)	
そう思う	353 (55.2)
[技術や経験]	
技術・知識・資格 (n = 661)	
あり	95 (14.4)
中期のボランティア経験 (n = 659)	
かなり・少しした	215 (32.6)
[社会・環境的状况]	
親しい友人や仲間の数 (n = 656)	
7人以上	162 (24.7)
5 ~ 6人	115 (17.5)
3 ~ 4人	183 (27.9)
1 ~ 2人	112 (17.1)
いない	84 (12.8)
ボランティア活動情報の認知 (n = 649)	
知っている	122 (18.8)

注 各項目で欠損値があるため n = 671とならない。

そう思う = 1, そう思わない = 0とした。「技術や経験」の領域(2変数)について、技術・知識・資格は、地域で活動する際に活用できる何らかの技術・知識・資格があるかどうかを尋ね¹¹⁾、あり = 1, どちらともいえない・なし = 0とし、経験は、40 ~ 50歳代の時にボランティアをしたかどうか(以下、中期のボランティア経験)を尋ね、かなり・少しした = 1, していない = 0とした。「社会・環境的状况」の領域(2変数)について、親しい友人や仲間の数は、7人以上 = 4点, 5 ~ 6人 = 3点, 3 ~ 4人 = 2点, 1 ~ 2人 = 1点, いない = 0点とした。ボランティア活動情報の認知は、ボランティアの活動に参加する機会についての情報を同世代の人より知っていると思うかどうかを尋ね、知っている = 1, 知らない = 0とした。

3) 分析方法

ボランティア活動の状況を示す変数について、「週に3回以上」から「年に1 ~ 2回」までの回答を活動あり = 1, 「全くしていない」を活動なし = 0とする2値変数に再カテゴリー化し、これを従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。その際、まず、領域ごとに、該当する変数を独立変数に投入した(Model 1 ~ 5)。次に、領域ごとの分析で統計学的に有意な関連が認められたすべての変数を独立変数に投入した(Model 6)。これらの分析において、年齢と性別(女性 = 0)を統制変数として投入した。統計学的有意水準は5%とした。

独立変数間の関係について、共線性の問題が懸念されるような高い相関はみられないことを確認している。

研究結果

(1) ボランティア活動に関する項目の単純集計結果

分析対象者の特性を、表2に示した。ボランティア活動をしている者は161人(24.0%)であり、年に1 ~ 2回が9.1%と最も多く、次に月に1 ~ 2回で6.1%となっていた(図1)。ボランティア活動への関心がある者(とても・ま

ああると回答した者)は58.8%，活動への参加意向がある者(とても・まあ思うと回答した者)は48.9%であった(図2)。

(2) ボランティア活動に関連する要因

領域ごとにロジスティック回帰分析を行い、ボランティア活動に関連する要因を検討した結果、活動なしの者と比較した活動ありの者の特性は、次のとおりである。ボランティア活動をしている者は、「家族・経済・他」では、居住年

数が20年以上、「健康」では、主観的健康感が高い、「暮らし方の志向性」では、地域に貢献する活動をしたい、「技術や経験」では、技術・知識・資格がある、中年期にボランティア経験がある、「社会・環境的状况」では、親しい友人や仲間の数が多い、ボランティア活動情報の認知の程度が高いという特性であった(表3)。

統計学的な有意が認められた変数をすべて投入して分析した結果、ボランティア活動をしている者は、「中年期にボランティア経験がある」「地域に貢献する活動をしたい」「ボランティア活動情報の認知の程度が高い」(p < 0.001)、「技術・知識・資格がある」「親しい友人や仲間の数が多い」(p < 0.01)、「主観的健康感が高い」(p < 0.05)という特性であった。領域別分析で有意が認められた居住年数は、関連性が消失した(表4)。

考 察

ボランティア活動への関心のある者は6割弱、参加意向のある者は5割弱であるのに対し、実際に活動している者は2割強にとどまっていた。活動への関心や参加意向はあるが活動していない者を実際の活動に結びつけていけるよう環境を整備していくことにより、ボランティア活動に参加する高齢者の割合がさらに増加することが期待できる。

図1 ボランティア活動の状況 (n=671)

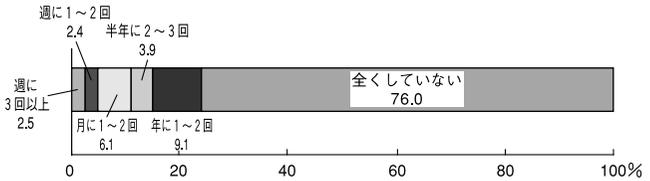


図2 ボランティア活動に対する関心の程度および参加意向

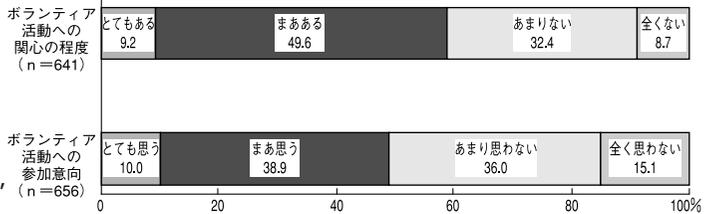


表3 領域別に検討したボランティア活動に関連する要因 (Model 1~5)

	オッズ比(95%信頼区間)
[家族・経済・他 (Model 1)]	
配偶者の有無	1.03 (0.67-1.58)
居住年数 (基準: 10年未満)	
10~20年未満	1.96 (0.81-4.74)
20年以上	2.51 (1.21-5.23) *
学歴 (基準: 中学校卒業)	1.20 (0.82-1.75)
暮らし向き	1.16 (0.94-1.44)
年齢	1.00 (0.97-1.04)
性別 (0 = 女性)	0.82 (0.55-1.22)
モデルχ ² (df)	14.35 (7) *
[健康 (Model 2)]	
IADL	1.35 (0.98-1.84)
主観的健康感	1.73 (1.28-2.35) ***
年齢	1.02 (0.99-1.06)
性別 (0 = 女性)	0.81 (0.56-1.18)
モデルχ ² (df)	26.81 (4) ***
[暮らし方の志向性 (Model 3)]	
生活に充実感を持ちたい	0.56 (0.25-1.26)
新たな友人を得たい	1.12 (0.72-1.76)
社会への見方を広げたい	1.33 (0.75-2.35)
健康や体力に自信をつけたい	0.80 (0.35-1.85)
新たな知識や技術を身につけたい	1.05 (0.65-1.68)
地域に貢献する活動をしたい	4.67 (2.77-7.83) ***
若い世代と交流したい	1.33 (0.83-2.11)
年齢	1.02 (0.98-1.06)
性別 (0 = 女性)	0.65 (0.44-0.97) *
モデルχ ² (df)	71.24 (9) ***
[技術や経験 (Model 4)]	
技術・知識・資格	3.43 (2.05-5.74) ***
中年期のボランティア経験	7.71 (5.11-11.64) ***
年齢	0.99 (0.95-1.03)
性別 (0 = 女性)	0.65 (0.43-0.97) *
モデルχ ² (df)	142.91 (4) ***
[社会・環境的状况 (Model 5)]	
親しい友人や仲間の数	1.68 (1.42-1.98) ***
ボランティア活動情報の認知	5.45 (3.48-8.53) ***
年齢	1.01 (0.97-1.05)
性別 (0 = 女性)	0.93 (0.62-1.39)
モデルχ ² (df)	123.90 (4) ***

注 1) 活動あり (= 1) vs 活動なし (= 0)
 2) *** P < 0.001, ** P < 0.01, * P < 0.05

領域別の分析で明らかになった高齢者のボランティア活動に関連する7つの要因のうち、居住年数以外の6変数は最終的な分析においても関連性が認められた。

0.1%水準で有意であった、中年期のボランティア経験、地域に貢献する活動をしたい、ボランティア活動情報の認知という3変数のオッズ比をみると、中年期のボランティア経験が5.49(95%信頼区間 3.42-8.81)と最も高かった。Peters-Davisらは、過去のボランティア経験が最も大きな関連要因であったことを示しており⁸⁾、本研究の結果はこれを支持することとなった。Okunの研究においても、最も大きな要因ではなかったものの関連性があったことが報告されている⁶⁾。この結果から、高齢期以前にボランティア活動の経験を持ってもらえるように活動参加しやすい場を設けていくこと、高齢期に向けた準備として、活動経験をあらかじめ持つておくことの意義を啓発していくことが求められる。本研究の結果は、中年期の活動経験がない者は、高齢期になってボランティア活動を始めにくいことも示している。定年退職後にボランティア活動に目を向けようとした際に、どのように活動していけばよいかわからなかったり活動参加をちゅうちょしたりしている者も少なくないことが推測されるため、そのような者を活動参加に円滑に結びつけていく仕組みづくりも必要であろう。

地域に貢献する活動をしたいのオッズ比も2.98(95%信頼区間 1.75-5.07)と比較的高かった。この結果に類似した知見について、金らは、55歳以上の中高年者における社会参加の関連要因の研究において、ボランティア活動を含む7つの活動を「社会・奉仕活動」として多変量解析を行い、地域共生意識が最も強い関連を示したことを報告している¹²⁾。このように、地域のために役に立ちたいという志向を有する者は、その思いをボランティア活動への参加という形で具現化するのである。

ボランティア活動情報の認知の程度が高いのオッズ比も2.96(95%信頼区間 1.73-5.05)と比較的高かった。Peters-Davisらは、ボラン

表4 ボランティア活動に関連する要因 (Model 6)

	オッズ比 (95%信頼区間)
居住年数 (基準: 10年未満)	
10~20年未満	1.06 (0.36-3.15)
20年以上	1.89 (0.78-4.59)
主観的健康感	1.54 (1.08-2.20) *
地域に貢献する活動をしたい	2.98 (1.75-5.07) ***
技術・知識・資格	2.38 (1.28-4.43) **
中年期のボランティア経験	5.49 (3.42-8.81) ***
親しい友人や仲間の数	1.35 (1.11-1.65) **
ボランティア活動情報の認知	2.96 (1.73-5.05) ***
年齢	1.01 (0.96-1.06)
性別 (0 = 女性)	0.62 (0.39-1.00) *
モデル χ^2 (df)	218.16 (10) ***

注 1) 活動あり (= 1) vs 活動なし (= 0)
2) *** $P < 0.001$, ** $P < 0.01$, * $P < 0.05$

ティア活動をしている者の特性として、身近に参加機会があると認識している者という結果を報告している⁸⁾。生涯学習の世論調査によると、国や地方公共団体に対するボランティア活動についての要望のなかに(60歳以上、複数回答)、「情報のさらなる提供」「情報提供・相談をするボランティアセンターの整備」という回答が比較的多く¹³⁾、全国ボランティア活動者実態調査では、活動をなかなか始められなかった理由として(10歳代以上、複数回答)、「情報入手方法がわからなかった」が39.4%に達していた¹⁴⁾。これらの結果から、活動情報の認知の程度を高めていくための環境整備を積極的に行っていく必要があるといえよう。

技術・知識・資格、親しい友人や仲間の数は、1%水準で有意であった。技術・知識・資格があるという特性について、松岡は、ボランティア活動を含んだ複数の活動を1つの変数で捉え、関連要因を多変量解析により検討し、比較的強い関連があったことを報告している¹¹⁾。内閣府の調査結果によると、地域のための奉仕活動を行うための必要条件として、「技術や経験がいかせること」という回答(60歳以上、複数回答)⁵⁾、ボランティア活動経験がない理由として、「活動に必要な知識・技能を身につける機会がないから(なかったから)」という回答(15歳以上、複数回答)⁶⁾がみられる。これらのことから、何らかの技術・知識・資格を有する者は、それを活用しようと活動参加したり、それをいかして手伝ってほしいと依頼されたり

するために、活動参加につながっていったものと思われる。

親しい友人や仲間の数が多いという特性について、親しい友人や隣人の数が多い者ほど社会参加をしていたという知見¹⁾、ボランティア活動参加理由として「友人や仲間に誘われた」という回答が20.2%という調査結果(60歳代以上、複数回答)⁴⁾が示されている。親しい友人や仲間の数が多い者は、彼らからボランティア活動の話聞いて関心が高まったり、共に活動しよう誘われたりする機会が多くなり、活動参加に結びつきやすくなることが推測される。

その他の関連要因で、主観的健康感が高いという特性($p < 0.05$)について、健康状態の指標が多少異なるものもあるが、ボランティア活動をしている者の特性は健康状態が良好であるという先行研究の知見²⁾⁵⁾⁷⁾を支持した。統制変数として投入した性別は、領域別の分析では有意な関連が認められた場合とそうではない場合がみられたが、最終的な分析では、男性と比較して女性の方がボランティア活動に参加しているという結果が示された。性別とボランティア活動の関係は、先行研究により有意な関連が認められたものとそうでないものがあり一貫していないが、本研究は、男性と比較して女性の方が活動していることを示した Kincade らの結果²⁾を支持することとなった。

最後に、本研究は、大阪市という大都市に住む高齢者を対象に行ったものである。本研究の結果が他の地域の高齢者にどの程度あてはまるのかは不明であるため、追試を行って確認していくことが求められる。

文 献

- 1) 総務省．平成13年社会生活基本調査結果の概要．総務省ホームページ (<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/shuyo/zuhyou/c002.xls>) 2006.4.22
- 2) Kincade JE, Rabiner DJ, Bernard SL, et al. Older adults as a community resource : results from the national survey of self-care and aging. *The Gerontologist* 1996 ; 36(4) : 474-82.
- 3) 厚生労働省．厚生労働白書(平成15年版)．東京 : ぎょうせい, 2003 ; 37-56 .
- 4) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二．ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 : 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義 . 日本公衆衛生雑誌 2005 ; 52(4) : 293-307 .
- 5) Choi LH. Factors affecting volunteerism among older adults. *The Journal of Applied Gerontology* 2003 ; 22(2) : 179-96.
- 6) Okun MA. Predictors of volunteer status in a retirement community. *International Journal of Aging and Human Development* 1993 ; 36(1) : 57-74.
- 7) Herzog AR, Morgan JN. Formal volunteer work among older Americans. In Bass SA, Caro FG, Chen YP (Eds) *Achieving a Productive Aging Society*. Westport CT : Auburn House 1993 ; 119-42.
- 8) Peters-Davis ND, Burant CJ, Baunschweig HM. Factors associated with volunteer behavior among community dwelling older persons. *Activities, Adaptation & Aging* 2001 ; 26(2) : 29-44.
- 9) Warburton J, Terry DJ, Rosenman LS, et al. Differences between older volunteers and nonvolunteers : attitudinal, normative, and control beliefs. *Research on Aging* 2001 ; 23(5) : 586-605.
- 10) 内閣府．高齢者の地域社会への参加に関する意識調査．内閣府ホームページ (http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_sougou/h2-2.pdf) 2005.7.3
- 11) 松岡英子．高齢者の社会参加とその関連要因．*老年社会科学* 1992 ; 14 : 15-23.
- 12) 金貞任, 新開省二, 熊谷修, 他．地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因 : 埼玉県鳩山町の調査から．*日本公衆衛生雑誌* 2004 ; 51(5) : 322-34 .
- 13) 内閣府．生涯学習に関する世論調査．内閣府ホームページ (<http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-gakushu/2-3.html>) 2006.4.24
- 14) 全国社会福祉協議会．全国ボランティア活動者実態調査報告書．地域福祉・ボランティア情報ネットワークホームページ (http://www3.shakyo.or.jp/cdvc/data/files/DD_416161281128.pdf) 2006.4.24
- 15) 内閣府．高齢者の地域社会への参加に関する意識調査．内閣府ホームページ (http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_sougou/h2-3.pdf) 2005.7.3
- 16) 内閣府．生涯学習とボランティア活動に関する世論調査．内閣府ホームページ (<http://www8.cao.go.jp/survey/h05/H05-11-05-10.html>) 2006.3.13